

少人数グループによる学習について

13期生 伊藤 正子

1 はじめに

少人数のグループが活動の形態として用いられるのは、大人数での活動よりも自分の思いが出しやすい、自分の思いが活動に反映されやすいという長所があるからである。

音楽科におけるグループ学習は、昭和52年学習指導要領以降の、一斉指導から個に焦点をあてた指導への移行にともない、アンサンブル学習とともに授業に取り入れられた。平成元年学習指導要領以降は少人数による学習形態は定着している。(大熊、1999)

一斉指導ではどうしても教師主導になりがちな授業を、児童がより主体的に参加する授業にし、よりよい形で児童の音楽的能力を育てることができるよう、少人数学習は取り入れられている。

では、どんな授業にも少人数学習は適しているのだろうか。一斉指導に短所だけでなく長所もあるように、少人数学習にも長所と短所がある。例えば、グループ分けをする地点ですでに問題は起きることがある。なぜ好きな者同士、仲の良い者同士ではいけないのかと、児童から不満の声があがることは少なくないだろう。学級に一騒動を起こしてまで、グループに分けて学習することにこだわる必要があるのだろうか。しかし学校教育の中でグループに分かれてする活動は、音楽の授業の中に限らず数多い。それは今までの教育上の観点から、グループによる活動が学習に有効であると認められているからである。ではどんな授業に少人数によるグループ学習は有効的なのだろうか。また、問題点はどのようなところにあるのだろうか。

2 「個」の限界

個を重視した教育が新指導要領でも重視されている。一斉指導から「個」重視の指導へ変化していくなかで、学習の個別化は個人の能力や適性に応じて、つまり児童のそれぞれのわかりかたに応じて指導内容や指導方法を変えていくことで実現されている。しかし学習は個人の行為であるが、自分

以外の者が学習に何らかの形でかかわっていることが重要である。というのも、一人で考えることは大変なことであり、疲れることであるからである。自分の考えについて賛同したり、意見を述べたりしてくれることが必要である。思考は自己の内面の活動であるが、その在り方は外在する他者の思考と深くかかわっている。(山田、1987)

例えば積極的に発言しないような学習態度が受動的な子も、集団思考のなかでは友達の意見を聞いて自分なりの感想を持ったり意見の相違を感じたりして、本人なりの位置をもって思考している。しかしそれは、教師が注意深く観察していたり、あるいは本人のノートやプリント等を見ることができたりするためにわかることである。周囲の児童から見ればそうとはわからないことが多い。内面でどんなに良い考えを持っていても、一人では思考の深化に限界がある。またクラスとしての思考も少数の限られた考えだけでは深まらない。どれだけ「個」を重視した教育が叫ばれても、集団での学習が必要とされるのは、

話し合うことは民主主義の倫理の具体化である話し合いによって決められたことは行動実践の強い動機づけになると考えられる

話し合うことの意味(例えば自分の意見が集団で認められたり役に立ったりすると、自己に対する満足感や自己有用感を得ることができる)

コミュニケーション技術の学習に役立つ

自己認識と他者認識が促進され(つまり自分と他者との違いを意見の中に確認することができ)社会性の発達が助長される

集団思考は個人思考より優れている

といった理由があるからである。(長島、1976)

発言しない子は、ほかの児童の意見を聞くことで思考の深化を可能にしても、自己表現能力は育てられない。自分の意見を言葉にすることで思考はさらに確固とした形を持ち、また相手の意見を

より冷静にしっかりと聞き、理解する能力が育つ。自己の思考の表出と他者の思考の受け入れは相反するものではなく、密接にかかわるものである。個の思考は集団思考によって支えられ、また集団思考は個の思考を基礎にして成立しているのである。(山田、1987)

音楽の授業において、児童は性差・学年差に関係なく、一人で歌ったり演奏したりするよりも、みんなでそれらの活動をするほうが楽しいと感じている。(伊藤、1998)音楽はその性質から気持ちのよい感じや感動を与えてくれ、音楽活動することで達成感や充実感も味わせてくれるが、それを集団で共有することでより一層気持ちが広がったり、感動が深まったりする。一人で音楽活動をするよりも集団で活動する方がより音楽の良さを感じることができ、音楽を楽しむことができるのである。

3 グループ学習の有効性と問題点についての考察

一斉指導から個別指導へと教育方法の傾向が変化してきたように、音楽の授業においても個を重視した指導は避けられない。思考と同様、鑑賞・歌唱・器楽演奏・創作表現等の音楽的活動も、個人活動を基本としたものだからである。しかし個人それぞれが、それぞれの役割を果たして一つの大きな演奏が作りあげられるように、一人ひとりをおろそかにしては良い集団活動は成立しない。一人ひとりを高めながら、集団としての長所を伸ばし、またその集団によって個人も成長することができるように、教師は働きかけていかなければならない。

グループによる学習は、一斉指導よりも一人ひとりの考えや様子が表出しやすく、わかりやすい。また個別学習とは違って相互に影響し合うことができる。一斉学習が「活動の広がり」の場であるならば、グループによる学習は「活動の深まり」を求める場だと言える。しかしグループ学習では個人の能力差や人間関係もはっきり表れてくる。そしてそれが相互に影響し合いやすいために、かえって学習に支障をきたす場合もある。グループ内でなれあったり、埋没したりせず、自分の思いや演奏を生かすために、グループ学習は集団学習よりもさらにしっかりと個人の深い思考力や自己表現力、技術力といった能力が必要となるのである。教師はグループ活動による学習を設定する場合、各個人の思考力、表現力、演奏技術力、性格や人間関係等に対する理解が必要不可欠であり、

教材、授業方法等によってもっとも学習目標を達成できるグループ編成の方法を考えなければならない。

(1) グループ分け

合唱・合奏において、単にパートごとに分けた編成は、学級におけるグループとしては最も規模の大きいものができる。ここではそれぞれパートリーダーや練習を進めるリーダーとしての指揮係を設けることで、子どもたちが自主的に活動し学ぶ場を作ることができる。

5～8人程度に分かれたグループでは、細かい表現の工夫をするといった、活動を掘り下げる活動に適している。また、2人1組のペア学習は、相互に教えあったり、工夫しあったりする活動に効果がある。

ただし、例えば表現を工夫するといった、個人の感性に基づいた活動は、ただ人数で分けただけのグループでは、構成人数が多いほど個人の思いが集団の中で生かされにくくなるため、同じ考えを持った児童同士をグループにするとといった、人数によらない、性質によるグループ分けをする必要がある。

(2) 活動中

歌唱活動において、全体で歌っているときには、それぞれの声が重なり合う感じがかみにくい子がいる。また、斉唱や合唱あるいは合奏においても、同じパートの者が他にも複数いる集団活動・多人数グループ活動において、自分がその集団の中で、あるいは演奏の中で、どのような役割を果たしているのを感じられずに、自分一人くらい声を出さなくても大丈夫といった気持ちになったり、熱心に歌わなくなったりする児童が見られる。これらのような場合は、テープに録音して聴く方法も考えられるが、自分たちの歌声であるということをもっと認識しやすい方法として、学級を2つ以上のグループに分けて互いに聴き合うことで、自分の出している声がかどのようか聴こえるのかがよくわかる。しかし少人数グループでの問題点は声の大きさが小さくなることである。声が小さいと、普段から合唱の時に「もっと声を大きく!」「もっと口を開けて!」と教師に言われている子どもたちは、理想とする声の大きさに近づけようと声をはりあげるために、その歌は無理のある声で歌われる。また歌い方や表現方法を自分たちでよく考えていても表現は生きてこず、その声のために苦しそうな歌に聞こえてしまう。少人数で歌唱活動を行う場合は、その人数に見合った指導をするべきである。全体の合唱指導のための方法の一つとして考えるのか、少人数グループによる歌唱そのものを目的として学習目標の達成を目指しているのか、音程をとるためにしているグループ活動なのか、表現の工夫をさせたいのか等を考えなければならない。グ

ループで何をさせたいのか、何を学ばせたいのか、どのように成長してほしいのかという確かな視点を、当たり前だが持っていなければならない。

(3) 活動環境

少人数グループによる学習活動を実践する場合、どうしても問題となるのが、練習場所や楽器の確保という、学習環境に関係することである。大規模校のように音楽室が2つ以上あったり、音楽室以外にも隣に音響・防音等に関する設備が整った教室があったり、あるいはオープンスペースや空き教室があればよいが、隣が普通教室である場合、さまざまに鳴っている音はどうしても迷惑になるのではないかと心配してしまうことがある。個人活動ではヘッドフォンを使うこともできるが、グループでの活動ではできないので、周囲のことを気にしすぎずに、いかに自分たちのグループの活動に集中してできるかが大切であろう。教師は、児童が集中してできる活動の設定、教材の選択をすることが重要である。

(4) 発表

グループ学習では、互いに聴き合い、考えを深め、表現を高め合うことができるように、グループでの学習の成果を全体で発表し合う場が不可欠である。それぞれのグループ同士が発表し、それに対してまた他の児童が思いを持ち、意見を交換することでグループ学習で得られた内容を全体にも浸透させることができる。

また、友達の演奏や意見をただ聴くだけでなく、それを自分の中で生かす、あるいは意見の交換をすることで、さらに友達の中で生かしてもらおうといった、はっきりとした目的があれば、表現の能力とともに、鑑賞の能力も高められる。発表時にも鑑賞時にもポイントを押さえた活動が大切である。

(5) 評価及びグループ学習全体について

個人活動、グループ活動等の学習形態に関わらず、歌唱や演奏活動、創作活動等は、ある程度作品として形ができているものの方が、わかりやすい。音楽的能力の育成を目標とする点において、作品の完成をないがしろにすることはできないが、音楽を情操教育としてとらえるならば、こういう活動をしてその結果このようなものができましたという結果より、こういう活動の中で児童のこのようところが伸びた、このように良いところが出てきたという「知」より「情」を重視、「頭・手」よりも「心」を重視することが大切なのではないだろうか。学校での学習は生活面の指導と切って考えることはできない。専科担当の教師でも、担任同様、児童の人間としての成長を助けていかなけれ

ばならないのである。自分以外の人間と関わり、人間として生きていく上で不可欠な能力を学校という集団の中で育成するために、グループ学習は集団の中での自分自身を成長させられる場といえよう。先にも少し述べたが、グループ学習は一斉学習で発表するときのように、周囲の友達がある程度自分の意見や思いを聞き入れてくれる状態であるのではなく、児童同士の活動が主となるために、グループの人数が多くないほど、それぞれが自己主張しやすく、活動は活発になる。そして友達の目や耳が近いぶん、それが気になり、自分自身がしっかりしていないと自分を表現し、理解してもらい、集団の中で生かしていくことができないからである。

5 おわりに

音楽の授業では児童の音楽性を伸ばし、心を豊かにすることができるように、どんなにいいものが出てきても、それがただ苦しんだだけの産物を生み出した学習というのではなく、達成感や解放感といった音楽の楽しさの要素を得る学習でないといけない。音楽の楽しさを感じることで、次への意欲につながり、さらに音楽的成長をとげるための意欲・推進力になるだろう。児童のノート、プリント等の目に見えるものや音楽という耳に聞こえるものという、形がはっきり感じられるものはわかりやすく、指導もしやすいが、音楽に関わることによって児童本人が感じているかいないかに関わらず、児童の内面にある感情・意識の成長、あるいは正の方向へ向かうこと、向くことが指導要領にある「豊かな情操」、心を豊かにすること、生きる力の元となることなのではないだろうか。

追記

今回、拙い文章ではあるが紀要に書かせていただいた内容は、経験を積んだ教師の方には、当たり前なことだろうと思う。私自身は臨時とは言え、教師として一年目でやっとこれだけのことがわかったといった状態であるので、もっと実践に基づいた、そして実際に授業等に生かせるように勉強していきたい。卒業論文でも研究したが、私自身どうしても抜けられないこだわりがあって、「集団」という言葉につながる内容となってしまったが、音楽的な内容についても、もっと勉強していきたいと思う。

鈴木ゼミ研究紀要第11号

参考・引用文献

- 羽生義正(編):『教育の基礎としての学習心理学』
1978 北大路書房
- 濱野政雄:『音楽教育学概説』 1967 音楽之友社
- 山田勉:『教える授業から育てる授業へ』 1987 黎明書房
- 片岡徳雄:『個を生かす集団づくり<1> 個を生かす集団づくり』 1976 黎明書房
- 大玉一實:『個を生かす集団づくり<5> 個を生かす集団学習』 1977 黎明書房
- 木下芳子(責任編集):『新・児童心理学講座第8巻 対人関係と社会性の発達』 1992 金子書房
- 木村信之、広瀬鉄雄、澤崎眞彦(編):『子どもと音楽 第8巻 「児童指導の実践」』 1987 同朋舎出版
- 児童研究会(編):『考える力を育てる <児童心理選集3>』 1976 金子書房
- 兵庫教育大学附属小学校教育研究会:『楽しい授業の創造 - 一斉指導からの脱却 - 』 1992 黎明書房
- 兵庫教育大学附属小学校教育研究会:『「人間として生きぬく力」に培う総合学習 - 子どもならではの知の創造 - 』 1999 黎明書房
- RADOCY,Rodolf E.&BOYLE,J.David.:『音楽行動の心理学』(徳丸吉彦、藤田英美子、北川純子共訳)
1985 音楽之友社
- 文部省:『小学校指導書 音楽編』 1993,1999 教育芸術社
- 市川都志春(他8名):『小学生の音楽4~6 指導書』 教育芸術社
- 池田千代:『児童の歌唱における心理的要因についての研究』 1994 兵庫教育大学卒業論文
- 伊藤正子:『楽しい音楽の授業のための集団構成についての研究』 1998 兵庫教育大学卒業論文
- 内田有一:『創作学習のイメージ形成におけるレディネスについて』 1999 鈴木ゼミ研究紀要第10号
- 大熊藤代子:『戦後音楽科教育の変遷とその教育効果について』 1999 兵庫教育大学修士論文
- 橋本里美:『音楽学習の妨げとなる要因の研究』
1996 兵庫教育大学修士論文
- 藤本真規子:『音楽をイメージ化する能力と読譜力・演奏技術の発達について』 1996 兵庫教育大学卒業論文